

# 守屋家掛幅と四季耕作図研究

佐川和裕

## はじめに

筆者はこれまで四季耕作図研究に専念してきたわけではないため、このような場での報告はいささかのためらいがある。しかし、ここでとりあげる守屋家所蔵の四季耕作図は、筆者の勤務している博物館で保管しており、その担当として少なくとも資料に対する一定の見解をもつことは必要なことであろう。そういうことからすれば、ここでの報告もお許しいただけるのではないかと考えている。なお、本資料の体裁は軸装されているため標題には掛幅としたが、他の四季耕作図との区別をつけるために守屋本と呼んでいくことにする。

守屋本は、これまでも描かれた図柄を具体的に読み解く作業がおこなわれており、いくつかの段階において本資料に対する評価が明瞭に変わってきたことがうかがえる。それは、四季耕作図の研究史の中で、守屋本がどのような位置付けをなされてきたのかということの意味であり、翻って守屋本という一つの資料をとって研究史全体の流れをみることもできる。いわば四季耕作図の研究史を考えるうえで象徴的な資料として守屋本をとらえることができよ

う。

## 一 守屋本と研究史

### 守屋本の履歴

守屋本は神奈川県内に残る四季耕作図として比較的早くから所在が知られていた。守屋家の立地する神奈川県中郡大磯町は相模湾に面した県南部のほぼ中央に位置しており、面積一万七〇〇〇平方メートル余りの小さな町である。県中央部を縦貫する相模川と県西部を縦貫する酒匂川に挟まれ、標高一〇〇メートル前後の山陵が連なる丘陵地（大磯丘陵）が展開しており、大磯町はその一角に位置している。町域の約六五パーセントを丘陵部が占めており、いわば畑作の卓越した地域である。また、現在の町域にはいわゆる近世村が一一か村あり、そのうちのひとつ「黒岩村」の名主を務めていたのが守屋家である。なお、黒岩村は標高一〇〇—一五〇メートルにかけて展開しており、大磯丘陵の中でも最も高いところに位置する集落といえる（図1）。

さて、守屋本が世に出る契機となったのは、神奈川県史資料所在調査にともなって昭和四五年（一九七〇）から開始された大磯町対象の悉皆調査に遡る。このとき守屋家では、天正一九年（一五九一）から大正期に至る八七六点に及ぶ資料が確認された。これは、大磯町内で最大の点数を誇るのもちろん、質的にもたいへん整っており、地域史を採るうえで貴重な資料群として注目された。守屋本は、調査担当者であった小松郁夫氏によりこれらの資料中から発見され、当時知られていたいくつかの耕作図を参考に、小松氏自身が四季耕作図と命名したのだという<sup>(2)</sup>。

調査の成果は、まず昭和四六年（一九七二）に『神奈川県史資料所在調査——大磯町<sup>(3)</sup>』に四季耕作図として目録化された。つづいて、昭和五〇年（一九七五）に『神奈川県史資料編7 近世<sup>(4)</sup>』の付録において図版と解説が付さ



図1 明治期の黒岩村周辺（明治16年迅速測図「平塚駅」）

れ、広く周知されることとなった。翌年には隣接する平塚市博物館の開館にともない、守屋家から寄託を受けて民俗・民具の常設展示の骨子として活用されることになる。その後、昭和六三年（一九八八）に大磯町郷土資料館の開館に際し、守屋家の意向によって平塚市博物館から大磯町郷土資料館へ移管されることとなった。以後、大磯町郷土資料館にて寄託を受けて保管し、現在に至っている。近世の農村や農民の生活を知るうえでのシンボリックな資料として、すでに多方面で利用されていることは周知のとおりである。

#### 研究史上における位置付けの変遷

先におこなわれた河野報告の中で、同氏は四季耕作図研究の節目としていくつかの段階を指摘しているが、守屋本の評価においても同じような段階を踏んでいる。

まず、『神奈川県史資料編7 近世（4）』の付録の解説を担当された児玉幸多氏によれば、①安政六年（一八五九）に雲齋陳人という人物が描いた。②守屋家の伝承として同家に滞在した旅僧が謝礼として描いた。③浮世絵の版下絵や肉筆画を連想させることから、狩野派に近い専門的な絵師が描いたと思われる。④近年表装して軸に仕立てた。⑤富士山を背景とした幕末の相模の田園風景をよく表現している、というように、総体として非常に在地性の高い資料として評価をしている。これにより資料的価値が認識されたことで、さまざまな場所で活用されるようになる。特に先に述べた平塚市博物館では複製写真パネルを配置し、画面に描かれている農具と現存する在来農具を対比させながら暮らしぶりを説明するという、情報をビジュアルに咀嚼した展示が実現した。

ところが、この展示を渡部武氏がご覧になったことで新たな段階へ進むことになる。同氏は、①四季耕作図は農作業の実相を知るうえではたいへん有用だが、ひとつの流行にのって徹底した粉本主義のもとで描かれている場合が多いため、もう一度これが相模の様子を描いたものなのか実情を精査したうえで利用すべきである。②江戸中期以降

に、「四季耕作図」の需要が名主層にまで及ぶにしたがい、絵師もその変化に対処する中において農耕図を描く必要に迫られた」と論じられた。<sup>(5)</sup>つまり、守屋本に限らず四季耕作図を地域博物館において地域資料として利用するには十分注意せよということであり、安易な利用について警鐘を鳴らされたと理解することができよう。そして、まさに守屋本はその役割を負ったといえる。

ついで、渡部氏の指摘を受けて、当時平塚市博物館に在職されていた小川直之氏が、農具の描き方・使用法・時代的な考証など、図柄についての具体的な再検討をおこなった。これは、平成三年（一九九一）に町田市立博物館で開催された特別展「多摩の民具・江戸時代の農具」における展示図録に収録された小川氏の論考につながる。<sup>(6)</sup>同氏はこの中で、①大磯周辺もしくは相模平野の水田稲作の様子をすべて忠実に描写しているわけではない。②富士山の描写は四季耕作図の需要が各階層へ、あるいは地方へと幅広く及ぶ中で、絵師が現地の実情にに応じて対応しようとしたもののひとつである。③襖絵・屏風絵から絵馬へと展開していく中間的な位置にある」と結論づけている。以後、さまざまな場において活用されることになるが、そのほとんどは小川氏の論考に準拠しているといえよう。

さて、守屋本は小川氏の論考でほぼ言い尽くされた感があつたが、平成八年（一九九六）の『瑞穂の国・日本——四季耕作図の世界』<sup>(7)</sup>の刊行を契機に、それまで絵画資料研究が美術史的な範疇に終始していたイメージを払拭し、歴史学・民俗学・民具学・農業技術史など、さまざまな視点からアプローチできるという気運が生成された。平成二一年（一九九九）には「絵画資料を読む会」という小さな研究会が結成され、<sup>(8)</sup>守屋本を保管している関係から筆者も参加させていただいた。その研究会の席上で守屋本をあらためて見直す機会を得たことで、まだ多くの検討の余地が残されていることに気付くこととなった。つぎに具体的に考証してみたい。



## 二 写実性の検討

### 図柄の検討

守屋本の図柄について具体的な考証を進めるうえで大きな手がかりとなるのが『神奈川県管下農具図説』<sup>(9)</sup>（以下『農具図説』）である。神奈川県内における明治期の農具調査にはいくつかあるが、<sup>(10)</sup>『農具図説』は明治一〇年（一八七七）に開催された内国勸業博覧会に出品された諸道具を写し取ったもので、そこには黒岩村と隣接する生沢村の二宮太平氏の出品として、田方農具・畑方農具・機具・山具・漁具の彩色図と図解がまとめられている。守屋本が描かれた安政六年（一八五九）とは一八年の差があるものの、今のところ最も年代に近い農具図である。ここでは『農具図説』との比較を中心に、当地周辺の民俗調査の成果も交えて検討していく。それは相模地方の稲作の実相を描いているのか、そのことを確認する作業といえる。

守屋本の本紙の部分は、縦一六・五センチメートル、横一二八・五センチメートルとやや横長である（図2）。画面右下に落款があり、「安政己未月見月八<sup>（ママ）</sup>朔 雲霽陳人寫」とある。これによって、安政六年（一八五九）八月一日に、雲霽陳人によって描かれたことが分かる。しかし、雲霽陳人がいかなる人物かは今のところ分かっていない。全体の構図は、画面右下からほぼ反時計回りに水田稲作の作業（三三工程）が描かれている（図3）。作業工程にそって具体的にみていくことにする。

①種粃浸し／作業は画面右下の種粃浸しから始まる。種粃が入っているとみられる俵を水に浸している場面である。稲は種粃から少し芽が出てきたところで苗代に蒔くのが通常である。したがってこの作業は、俵に入れた種粃を水に浸すことで発芽を促進させようとしている場面といえる。なお、使用している俵には二種類の形態がみえる。『農具

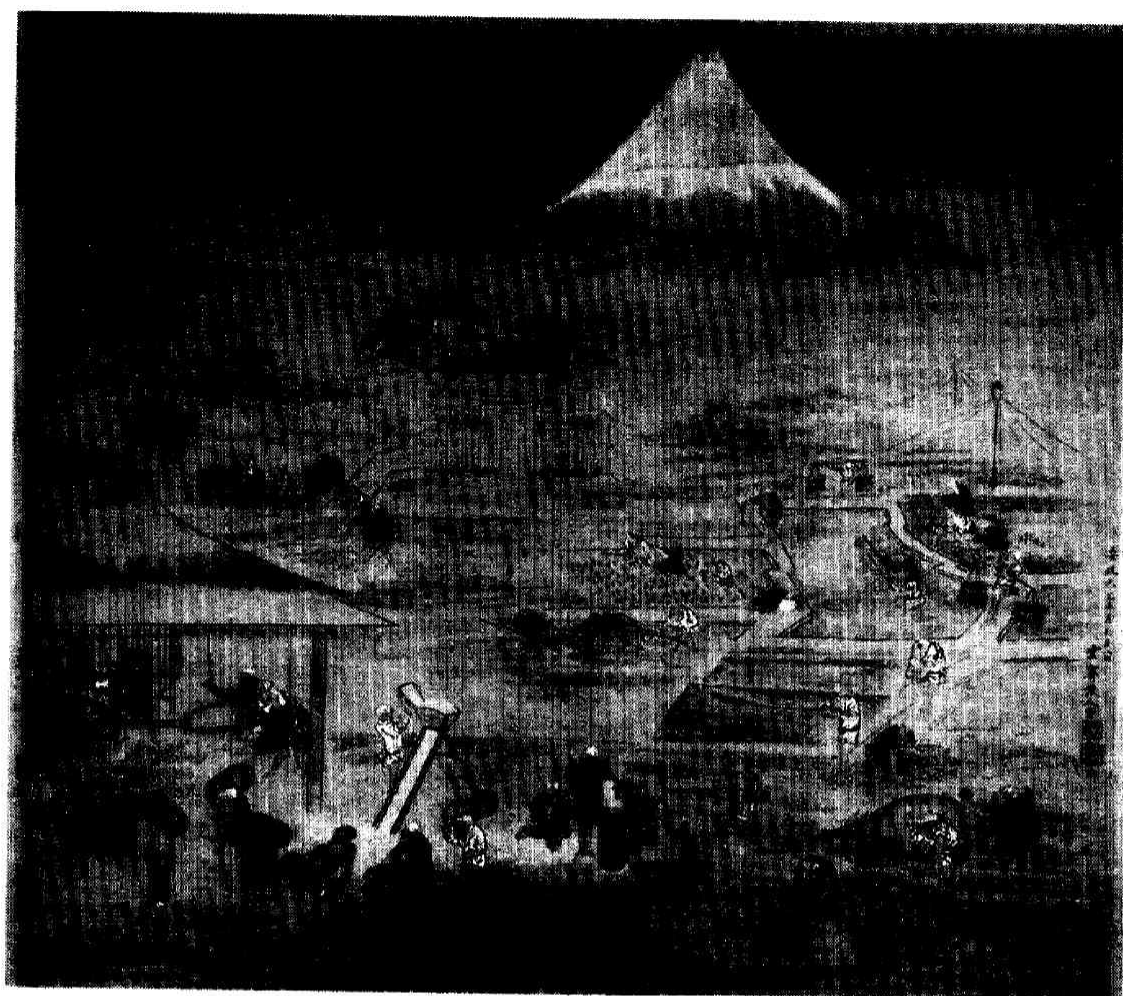


図2  
雲齊陳人筆  
「四季耕作図」

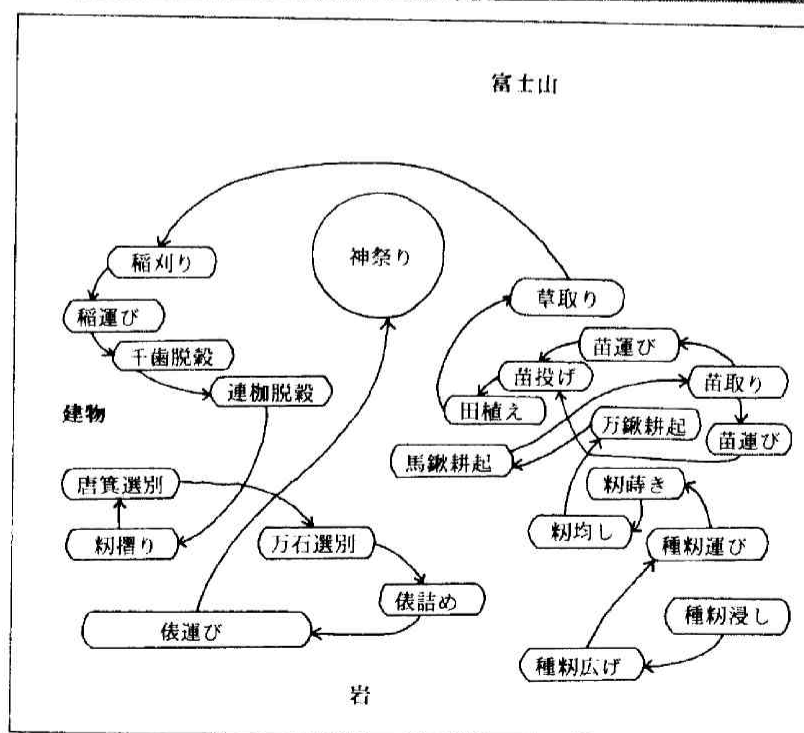


図3  
農作業の流れ

図説』では「種俵」という表記がある。蒔でつくる種俵と藁の細縄で編む種俵の二種類が記されており、いずれも「小俵」としてつくと説明されている。画面上では分からないが、収穫した玄米を入れる米俵（四斗俵）よりも小さな俵であることが推測される。

②種粃干し／蒔の上に種粃を広げている様子が見える。水からあげて一時的に干すことで、より一層発芽を促進させようという作業であろう。聞き取り調査の中で聞かれる作業が、そのまま画面上でも展開されている。

③種粃運び／藁製と思われる円い容器に種粃を入れ、もちあげようとしている。『農具図説』の彩色図には「モミカツギ」、図解には「粃籬」「粃イチッコ」とある。イチッコという呼び名は現在でも使われている。ただ、現存しているイチッコには藁縄の持ち手があるが、画面上では確認できない。

④種蒔き／ザルのようなものを抱えながら、畦から種を蒔いている。『農具図説』には、発芽した種粃を入れて苗代に運ぶ竹製のザルとして「種フリザル」と図解されている。なお、ここでは、種が風になびいて前方に流れているような描写が見える。『女大学宝箱』<sup>(1)</sup>（一七三三）にはこのような描写がみられ、以後は同様の描写がなされることが多いため、粉本を考えるうえで注意しておきたい。

⑤粃均し（苗代叩き）／当初は、何の作業をしているのか、よく分からなかった場面である（図4）。すなわち、（1）種を啄む鳥を追いつけているのではないか。四季耕作図には苗代を狙う鳥の描写も少なくない。（2）苗に付いたズイムシを払っているのではないか。ズイムシというのは蛾の一種で、当地域では農薬の普及まで学校行事としてズイムシ取りが授業に組み入れられていたこともあり、聞き取り調査の中では印象深く語られている作業である。（3）籾の油をつけて苗を洗うことによつて、害虫から防護するという作業ではないか。例えば『豊稼録』（一八二六）などにはその様子が記されている。しかし、当地周辺の資料や聞き取り調査の中にはでてこない。（4）種を蒔いたあとに葉のついた竹で上をなでて土をかける、いわゆる粃均しではないか。大正二年生まれの話者によれば、苗代





図4 苗代叩き

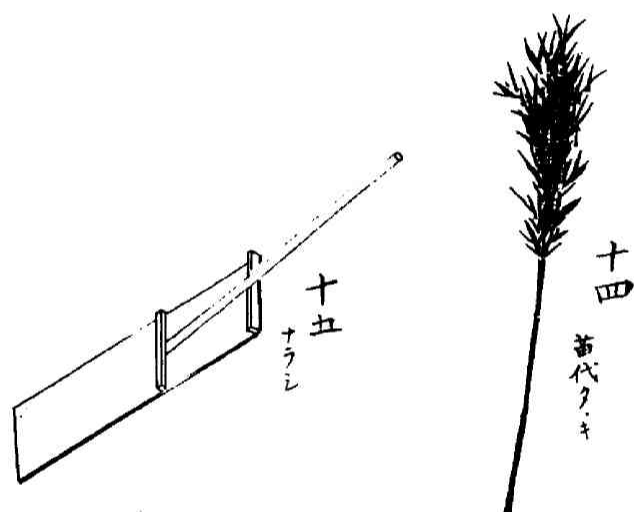


図5 「苗代タタキ」と「ナラシ」(『農具図説』)

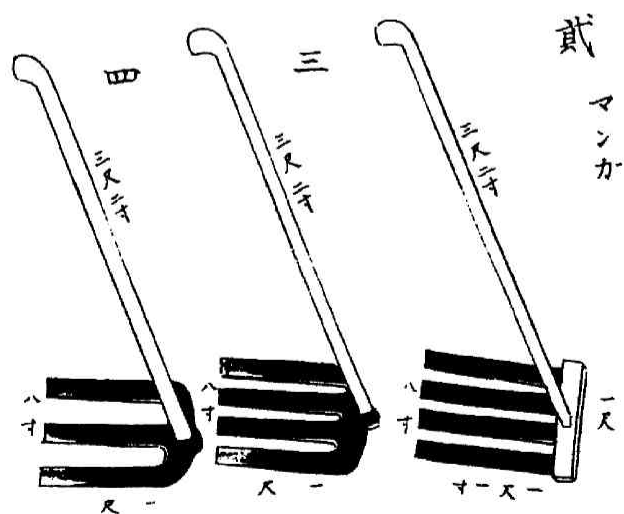


図6 「マンガ」(『農具図説』)

に三尺のウネをつくりへうで平らにして、種をふって葉のついた竹で上を撫でたという<sup>(12)</sup>。このような行為は当地周辺でもごく一般的におこなわれていた<sup>(13)</sup>。以上のように、図柄からはおおまかに四つの可能性を指摘することができる。

ところで、神奈川県横須賀市追浜の平田家所蔵の四季耕作図屏風（以下、平田本と呼ぶ）にもまったく同じ作業がみえる。平田本は、『女大学宝箱』を粉本として利用していることが分かっているが、同書から漏れた耕作描写も多くみられ、蓮田や鷹取山など地域の実情をかなり描き込んでいるとみられる。さらには慶応三年（一八六七）の製作と推測されており、年代的にも守屋本に非常に近い。同じ相模の地において、同じ幕末期という作品の中で共通の描写がみられることは大きな手がかりといえる。さらには『農具図説』に「苗代叩ハ 葉付ノ長六尺位ノ篠竹ニシテ稲ヲ蒔付シ<sup>(14)</sup> 直ニ泥水ヲ附ケ 静カニ叩キ種ヲ埋ルニ用ユ」ものとして「苗代タ、キ」が、あわせて「稲種ヲ蒔付ケシ<sup>(15)</sup> 直ニ上ヲナラシ種ヲ埋メルニ用ユル具」として「ナラシ」が図解されている（図5）。種を蒔いた土の上を「叩く」のか「撫でる」のかの行為の選択理由にどのような違いがあるのかは分からないが、同じ目的をもった作業として並行しておこなわれていたようである。なお、篠竹もしくは箒の描き方、手前の水田の畦に立ちながら後方の水田の作業をしているかのような描き方、あるいは箒が水平になりすぎてはいないかという疑問も残るのだが、これは作者の描写力の限界を示すものとして考えておくべきか<sup>(15)</sup>。

⑥万鋤耕起／アラオコシークロツケ—コギリ—シロカキという本田の準備作業のうち、アラオコシと思われる。当地周辺でマンガ（マンガックワ・マンノウ）と呼ぶ水田耕起用の鋤を振り上げて作業をしている様子が描かれている。すでに小川氏が指摘しているように、画面では鋤が五本刃で描かれており、三本刃もしくは四本刃が一般的である当地周辺の実情とは違っている。一方、『農具図説』では、三種類の鋤を図解している（図6）。ひとつは四本刃の「木胴萬能鋤」である。これは刃をおさえる部分が木製で、「木胴朽腐或ハ刃ノ板<sup>(マ)</sup>ケ<sup>(マ)</sup>離ル<sup>(マ)</sup>アルヲ以テ近來ニ至リ用ルモノ稀ナリ」という。また、他の二種類はいずれも「鉄胴萬能鋤」で、軟らかい田に使用する四本刃と、堅い田に使用

する三本刃があると説明している。つまり、もともと四本刃の「木胴萬能鋤」が、「鉄胴萬能鋤」へ改良普及される途上で、水田の条件によって四本刃・三本刃が生まれた過程をうかがうことができる。

⑦馬鋤耕起（代掻き）／牛を先導しながらマンガ（当地では人力のマンガと同じ呼称）を牽かせ、代掻きの作業をおこなっている。一見すると、牛の鼻竿を引いているようにみえる。西日本では鼻竿は使わずに一人で操作することが多いため、鼻竿だとすれば、むしろ関東的な描写ということになる。ところが、よくみると鼻竿ではなく首に縄をつけているようにとれる。まだ確認はしていないが、首に縄をつけた様子は比較的古い図柄の中に描かれているという<sup>(16)</sup>。だとすれば、西日本的であるか関東的であるかという区分よりも、この時期に流布していた絵手本に頼らずに、むしろ実景を描いたのではないかという見方も生まれてくる。また、畿内や西日本では頸木と鞍の両方を装着するのに対して、画面では鞍はつけているものの頸木はないので、これも関東的な描写に思える。

しかし、関東的な描写であることは認識しつつも、牛そのものの描写に問題が残る。相模地方の農耕における畜力の利用は馬が中心で、いわゆる耕牛の普及は早くても明治末、たいていは大正から昭和初めにかけてといわれ、いわゆる朝鮮牛が普及するまで俟たねばならない。要するに、この時期に相模の地に牛がいたのかということであり、これについては検討を要する部分が多いので、のちほど触れることにする。

なお、『農具図説』では、畑方農具の「畑ヒキマンガ」として図解されている。ここでは「刃ハ鉄ニテ作りタルモノニテ 畑ヲ鋤キ返スノ後 横堅ニ二度引キ搔キナラスニ用ユル具 又田ニ用ユルニハ 馬ノ尻ニ付ケ引廻シ田ヲ平均ス」とあり、畜力はやはり馬で、しかも畑地での利用が一般的であったこと、水田においても馬の利用はあるものの代掻きにのみ利用していたことが読み取れる。マンガの縄のつけ方が不備であることは小川氏が指摘しているとおりで、絵師は基本的な構造や機能を理解していなかったことがうかがえる。

⑧苗取り／女性二人と男性一人が苗取りをおこなっている。

⑨ 苗運び／男性二人が、竹製のカゴに苗を入れ、テンピンを使って担いで運んでいる。『農具図説』では、竹製のカゴに藁製の縄をつけ、苗を入れて苗場から植田へ持ち運ぶものとして「苗籠」が、苗籠を担ぐものとして「天秤」がそれぞれ図解されている。

⑩ 苗投げ／畦から苗を投げるしぐさをしている。

⑪ 田植え／女性三人と男性一人が田植えをおこなっている。苗取りから田植えまでの男女比には注意する必要がある。大磯丘陵を境に、西の足柄平野は女の田植え地帯、東の相模平野は男の田植え地帯であるといわれている。<sup>(18)</sup> 足柄平野の西郡<sup>(19)</sup>と呼ばれる地域では、男が本田の準備をしている間に女が苗を取って田植えをすることが一般的であり、相模平野では女が苗取りをおこない男が田植えをすることが一般的であった。当地域はまさにその境であり、女の田植えと男の田植えが混在する地域といえる。ここではその要因について探ることが目的ではないので深くは触れないが、当地では谷戸田を中心とした狭小な水田が多いため、基本的には家族で人手が足りる場合が多い。ただし、クメンのいい（経済力のある）家では奉公人を置くこともあり、また、多少広い水田をもつ家や地域では、テマガワリ・ハンデマ・スケといった互助組織が機能しているところもある。特に比較的広い水田をもつ平野部の一部の家では、西郡から腕利きの女性を依頼して田植えをしてもらっていたこともある<sup>(19)</sup>という。したがって、男女の数は単に絵画的なバランスだけで描いたのか、あるいは地域の実情を意識していたのかということとは大きな問題といえよう。

⑫ 草取り／水田の管理は、水周りや除草といった管理がともなう。笠を被り、横一列に並んで、いかにも効率的に作業を進めているようにもみえる。特に三列の作業集団がみえるが、当地での草取りは、時期を違えて一番草・二番草・三番草と、三回の草取りをおこなうことが望ましいといわれる。三列の作業集団は、このように三回の草取りを示しているという解釈も提示しておきたい。

なお、傍らには案山子あるいは鳥おどしのようなものが立っている。竹の柱上に藁状の塊と笠を載せ、縄を四方に

張り渡してある。一般的には縄に鳴子をつけるのであるが、図柄には描かれていない。『農具図説』でも「板二竹ヲ附ケシモノニテ 鳥ノ稻田ニ集マル片 縄ノ一端ヲ引キ竹ト竹ト触レテ聲ヲナサシメ 鳥ヲ威トスニ用ユ」とあるため、単純に鳴子を描き忘れたのだろうか。ただし、他の耕作図にも鳴子が描かれていない描写も少なくないので、もともと鳴子がついていないものであったことも考えられる。あるいは実相を知らない絵師が、たまたま粉本に鳴子が描かれていなかったために、誤りに気付かずそのまま鳴子を描かなかったのだろうか。これについてはもう少し他の事例を含めて検討する必要がある。

⑬ 稲刈り／つづいて画面は左半分に移り、稲刈りの場面となる。男女各一人が作業しており、うち男性の手には鎌が握られている。『農具図説』には三点の鎌が描かれている(図7)。一点は刃が鋸状の「鋸鎌」で、稲を刈るに用いるとある。もう二点は通常の刃の「鎌」で、草・稲・麦などを刈るとある。一般に鋸鎌が普及したのは遅く、神奈川県内では明治以降ではないかといわれている。<sup>(20)</sup> 安政六年(一八五九)の守屋本で描かれている鎌が鋸鎌でなく、明治一〇年(一八七七)の『農具図説』に鋸鎌が掲載されていることは、鋸鎌の普及の時期を考えるうえで、ひとつの有力な指針になるかもしれない。在地の情報が含まれているとすれば実に興味深い。

なお、空には三羽の鳥がみられるが、鳥の種類が何であるか判断は難しそうである。落雁などがパターンとして考えられるが、全体に彩色がある中で黒色で描かれていることを申し添えておきたい。

⑭ 稲束運び／牛の手綱をとり、牛の背に稲束をのせて運んでいる。ここでも大きな問題は牛の所有の有無であろう。あとで触れる。

⑮ 千歯脱穀／莖を敷いた上で、女性二人がイネコキマンガで稲扱きをしている。傍らでは扱き終えた稲束をまとめている様子もみえる。当地では竹製の歯をもつものは今のところ確認されていないが、鉄製の歯をもつものでは稲用と麦用の区別があった。稲用は麦用に比べて歯幅(歯の間)が狭かったと記憶されており、それぞれをイネコキマン



ガ・ムギコキマンガと称している。『農具図説』でも「稻コキマンガ」「麦コキ」と図解されている。

なお、千歯扱きというのは、一般的に穂（歯）と台部のみを購入し、脚部は使用者がつくることが多かったといわれており、販売元や地域によって使用形態や脚の相違が生ずることも考えられている。<sup>(21)</sup> 今後の課題としたい。

⑩連枷脱穀／男性二人が莚の上で、連枷による脱穀をおこなっている。当地周辺では、クルリあるいはクルリボウと呼ばれる道具で、<sup>(22)</sup> 脱穀（クルリブチ・ボウチ）の作業をしているところである。絵柄からクルリの打撃部が一本木であることが分かる。『農具図説』にも「クルリ」とある。当地周辺では柄は竹で、打撃部は杉丸太の一本木であり、図柄は地域の実態に沿っているといえよう。ただしひとつ気になるのは、かつては莚の上でクルリブチをすることはあまりなかったという伝承が聞き取られていることである。当地域では、クルリブチに際してニワと呼ばれる専用の土台をつくる場合が多い。粘り気のある土をもってきて踏み込み、さらには十分に叩いて固めて土台をつくり、その上でクルリブチをおこなうのである。そして、ニワの周りに莚を敷いておき、脱穀を終えた稲粒を箒を使って掃き落とすのである。<sup>(23)</sup> 画面上では莚の上で直接クルリブチをしているが、当地のような杉丸太の一本木での打撃はかなり強い衝撃を生むため、ただでさえ貴重であった莚に負担をかけはしないだろうか。当地域の聞き取りからすると、多少疑問の残る場面である。

⑪糶摺り／建物の軒下でカラウスによる糶摺りがおこなわれている。四人の男女が鎗り木を前後させて上臼を回転させており、男性一人が鎗り木の介添えをしながら糶を入れていく。四人の男女が鎗り木を前後させて上臼を回転させており、男性一人が鎗り木の介添えをしながら糶を入れていく。

ここでは二点を指摘しておきたい。まずひとつは、カラウスそのものの描き方である。一見すると、上臼に比べて下臼が極端に大きいような印象をもつ。しかし、下臼と思われる部分を、下臼とみるかどうかによって状況は変わってくる。下臼ではなく、箒状の「受け」と想定したらどうかだろうか。実は、鎗り木を使用するカラウスには、上臼と下臼の間に「受け」のあるものや、下臼を覆うような「受け」のあるものなど、いくつかのバリエーションがある。

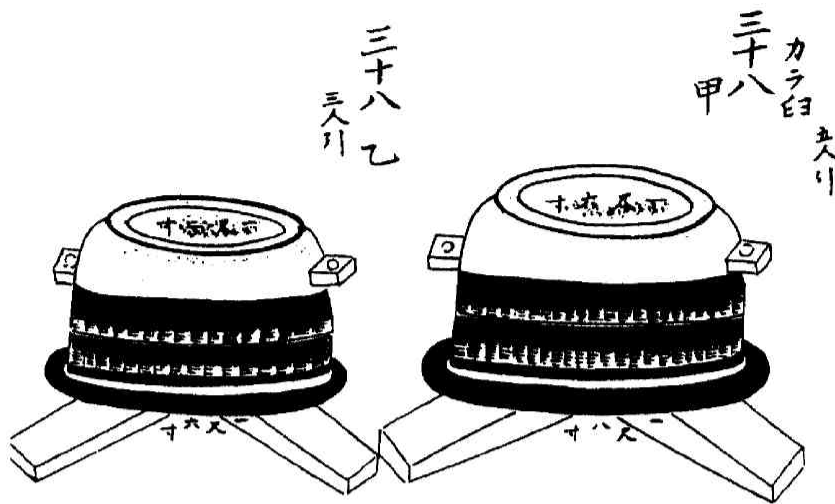


図8 「カラ白」(『農具図説』)

図7 「鎌」(『農具図説』)



図9  
六所神社 (昭和30年頃)

耕作図ではもちろんだが、相模から多摩地方においても「受け」のあるカラスは散見されるのである。そして、「受け」の部分に玄米が溜まっているとみればよいのではないだろうか。

もうひとつは、カラスの形態である。画面に描かれているのは、竹で編んだ枠に土を詰めた臼で、鍮り木で引く形態のものである。聞き取り調査などによれば、かつて当地周辺では、四斗樽を二つに輪切りにして中に粘土を詰め、カシの木の歯を埋め込んだ臼を竹竿で引く形態のものが一般的であり、画面に描かれているような鍮り木を使う臼はその後の普及であるという伝承が聞かれる。ところが、『農具図説』には「甲ハ五人引乙ハ三人引ナリ 丙ハ四斗樽ヲ二ツニ切りテ作りシモノニテ 上下ノ重ナル部分ノ方外面ニ竹ヲ編ミ付ケシモノニテ 其他甲乙ニ異ナルナシ只二人ニテ引ヲ異ナリトス 尤其製簡便ニシテ且甲乙ヨリ永ク使用スルニ堪ユルヲ以テ 近来多ク是レヲ用ユ」とある。ここでいう「甲乙」というのは「鍮り木」を使う大小二種類の臼のことであり、「丙」とは「引き竿」を使う臼のことである(図8)。つまり、従来は鍮り木を使う臼が多かったが、近年になって丈夫な引き竿を使う臼が普及してきたことと解釈される。ここには、少なくとも現状では聞き取ることでできない、それ以前の形態が浮かびあがっている。いわば、「鍮り木式」―「引き竿式」―「鍮り木式」というような変遷過程を想定することができるのである。なぜこのような変遷を辿ったのかは別の機会に検討したいが、少なくとも描かれているカラスは、それ自体に問題はないと考えている。

⑮唐箕選別／唐箕による選別の作業である。当地では、トウミ、もしくはトアオリと呼んでいる。画面のトウミにはいわゆる東日本型の特徴がみえる。<sup>(24)</sup>やや説明的に描かれていることから、人物に比してトウミが大きく過ぎる感がある。『農具図説』には「風簸」とある。彩色図に描かれている「風簸」と現存している明治末―大正期のトウミに、ほとんど大きさの違いはない。

⑯万石選別／箕でマンゴクの上戸部へ米を入れ、網上を流れ落しながら選別をしている。ただし、マンゴクには

流量調節がなかったり、後方の梯子部分に編み目が描かれているなど、記憶違いや描き違いなどもみられる。『農具図説』には、「箕」は「縦ハ籐横ハ竹ニテ編ミシモノ」で、大きさの違いで「一斗箕」と「五升箕」があるという。また、マンガクは、上戸と杵をつけて銅線の網をかけた「万石簾」として図解されている。なお、彩色図の「万石簾」は、当館に現存する大正期のマンガクと比べ、形態や寸法にほとんど変わりはない。

②0 俵詰め／杵で計量し、箕からジョウゴを使って俵に詰めている。通常、米を計量する一斗杵としては小さ過ぎる。『農具図説』でも穀物の計量には「一斗杵」を使用するとあり、やや描き方が気になる。また、ジョウゴは竹で編んだもので、「籾上戸」と図解されている。

②1 俵運び／米俵を運ぶ作業である。蔵などの描写がないため、どこに向けて運ぼうとしているのか判然としないが、全体の構図からすると多くのスペースを割いて描かれている。やはり、収穫という一年の総括を表わす場面であることに関係があるのだろうか。米俵をもちあげている者を描くなど、緊張が解きほぐされた喜びが感じられる。

②2 神祭り／神官が米を社殿へ寄進しようとしている場面である。画面全体の流れの中で、社殿だけは中央上部の雲間に鎮座しており、まさに一連の作業とは別格であることを強調しているといえよう。おそらくは農民ではない神官の姿に多少の違和感は覚える。河野氏の指摘によれば、千木や鯉木を棟に並べた立派な社殿は村の鎮守クラスではありえず、伊勢神宮を表わしているのではないかというのである。<sup>(25)</sup> 守屋本が当時の時代思潮から大きく影響を受けているであろう点には反映されているのではないかと<sup>(26)</sup>いうのである。守屋本が当時の時代思潮から大きく影響を受けているであろう点には同感であり、これについてはあとで触れたいが、社殿を地域の実情と摺り合わせたとき、筆者はひとつの可能性として六所神社の存在を考えている(図9)。同社は黒岩村に隣接する国府本郷村・国府新宿村・生沢村・虫窪村の氏神であるだけでなく、相模国の総社として広い信仰範囲をもっている。特に国府祭という祭礼では、近在五社が寄り集まって六所神社との間で特殊な神事がおこなわれるだけでなく、農事の目安として大切な節目となっている。現存し

ている建物も、一部に近世以前に建てられた可能性をもっており、小さな村の鎮守クラスではない存在感をもっている。

背景と人物／まず、当初から在地的な作品としての根拠となった富士山をみてみたい。画面の中では圧倒的な存在感はあるが、かなりデフォルメされているため相模からみた富士山の景観とはかけ離れている。一方で、その前衛の山々には、丹沢や箱根連山を彷彿とさせるような描写もみられる。富士山を中央に、右手にゴツゴツした山塊の丹沢、火山の特徴である丸みを帯びたやわらかな山稜の箱根などは、相模を題材とした浮世絵などでも描かれている。<sup>(26)</sup>

近景で気になるのは岩の存在である。この岩のもつ意味について、ふたつの可能性を指摘しておきたい。ひとつは全体の構図の取り方、もしくは描き方のパターンとしての存在である。つまり、画面下部の岩と上部の社殿によって左右の画面を分ける、あるいは手前の岩と遠景の富士山によって奥行感をもたせるなどの機能も見出せよう。また、他の四季耕作図にもみられるが、手前に岩や樹木を配す構図は多い。

もうひとつの可能性として述べておきたいのは、獅子岩という黒岩村の地名の起源となった岩の存在である。『皇国地誌』<sup>(27)</sup>（二八八二）には、「二ヶ所アリ 一ハ高サ二丈五尺幅三丈 一ハ高サ十五間幅八間」とある。小祠を造営し岩神明神として崇めていたが、元禄年間に氏神である池之神社へ合祀したという。なお、岩は現存しており、小字として岩神の地名も残っている。ここでは地域の象徴としての獅子岩の存在を付記しておきたい。

ところで、描かれている人物はすべて長着を着用し、尻はしより、あるいは襷がけをしているほか、必要に応じて手拭いを被ったり鉢巻をしている。なお、腰には煙管入れを差し込んでいる様子もみられる。当地周辺では、女性の仕事着は田畑ともに長着、尻はしより姿が一般的であった。一方、男性は早くから短衣の上衣と下衣を着用しており、それ以前に長着を着用していたのかどうかは、現在ではすでに聞き取ることは難しい。しかし、当地周辺において長着を着用していたという報告も散見される。<sup>(28)</sup>



## 在地的描写の可能性

さて、作業工程と農具およびその使用法などを一通りみてきた。確かに細かな部分で不具合な描写や誤った描写もあるが、農具をみる限りにおいては風景的、景観的というよりも説明的、辞書的に描いているふうも感じられる。「もの」を描くことに視点がより強く注がれば、「もの」と「人」とのバランスは必ずしも釣り合うとは限らない。これらのことは、むしろ絵師の視点や姿勢にかかわってくることである。その点を看過すれば、総体的には当地における水田稲作の実相とほとんど違和感はないという印象である。そのうえで、いくつか気付いた点を解決しておきたい。

まず、水田稲作の工程の中で描かれていない作業が気になった。それは、灌漑にかかわる作業の描写がみられないことである。そこに丘陵地における稲作であるという地域性をみることはできないだろうか。例えば、『新編相模国風土記稿』<sup>(29)</sup>（一八四二）では、薪炭は豊富で事欠かなかったが、耕作条件は必ずしもよくないという土地柄が記されている。また、明治一七年（一八八四）の土地台帳からは、全体の耕地面積のうち畑が九〇パーセントを超え、水田はわずか五、六パーセントに過ぎないことが読み取れる。当地の特徴は谷戸田と呼ばれる狭小な水田であり、基本的には天水をそのまま利用している。したがって、当地に限って言えば揚水のための灌漑設備などは見当たらない。このような状況を把握していたならば、たとえ絵手本があっても現地への対応として、不要な部分を除いて描くことも不思議ではない。

つぎに、再三問題となっている牛について触れなければならない。農耕を目的とした畜力の利用については、近畿・中国地方を主とする耕牛地帯、九州・四国の耕牛耕馬混合地帯、東日本の耕馬地帯というのがこれまでのおおまかな認識である。<sup>(30)</sup>ただし、耕馬地帯である東日本の中には、いくつかの場所で耕牛地帯がみられる。例えば佐渡ヶ島、

北上山地北部、伊豆半島南部、房総半島南部などがそれである。同地域はいずれも牛の産地として知られており、いわば分布の要因のひとつには、牛の産地の位置とその流通範囲にあると考えられている<sup>(31)</sup>。

神奈川県内の状況では、県西部と三浦半島部に早くから牛の存在がみられ、特に三浦半島では耕牛の存在がみとめられる。半島西側の粘質土地帯では、すでに江戸時代後期には牛による水田犁耕がおこなわれていたという<sup>(32)</sup>。粘質土で、しかも傾斜地に段々状に展開する狭い水田を犁耕するには、馬よりも方向転換や脚力に優れている牛の方が向いているということが大きな理由のようである。やや時代は下がるが、『皇国地誌』（一八七六年調査）によれば三浦半島における牛の分布はたいへん濃密であったことが分かる（図10）。

一方、守屋本の残されている当地周辺（淘綾郡・大住郡・足柄下郡・足柄上郡）について、村明細帳や村鑑・指出帳などの資料をもとに集計を試みた（表1）。ただし、資料は必ずしも同時期のものが残されているわけではないので、注意が必要だが目安にはなるだろう。集計によれば、頭数はわずかながらも意外と早い時期から牛の存在がみとめられる。もちろん耕牛としての使用があつたのかどうか分からないが、例えば、大磯町域において搾乳を目的とした牛を飼育するようになったのは明治一八年（一八八五）以降であるため<sup>(33)</sup>、それ以前は畜力としての利用がなされていたであろうことは予測される。

これらの資料からみると、分布は片寄っているものの相模に牛がまつたわけではないことが分かる。先に述べたように、牛の分布が産地とその流通範囲にかかわるとすれば、県西部は伊豆半島からの流れ、三浦半島は房総半島からの流れが考えられるだろう。さらに時代は新しくなるが、明治三〇年代には、黒岩村に近い国府新宿に「牛宿」があつたという<sup>(34)</sup>。これは、横浜方面に住む肉屋が外国人相手に商売するための肉牛を伊豆から引き入れる際、その途上の宿屋として機能していたのであり、少なくとも伊豆から横浜までの距離は流通可能な範囲にあつたことは想像に難くない。余談になるが、大磯町域や周辺では伊豆方面にかかわる伝承が頻繁に登場する<sup>(35)</sup>。相模と伊豆とは距

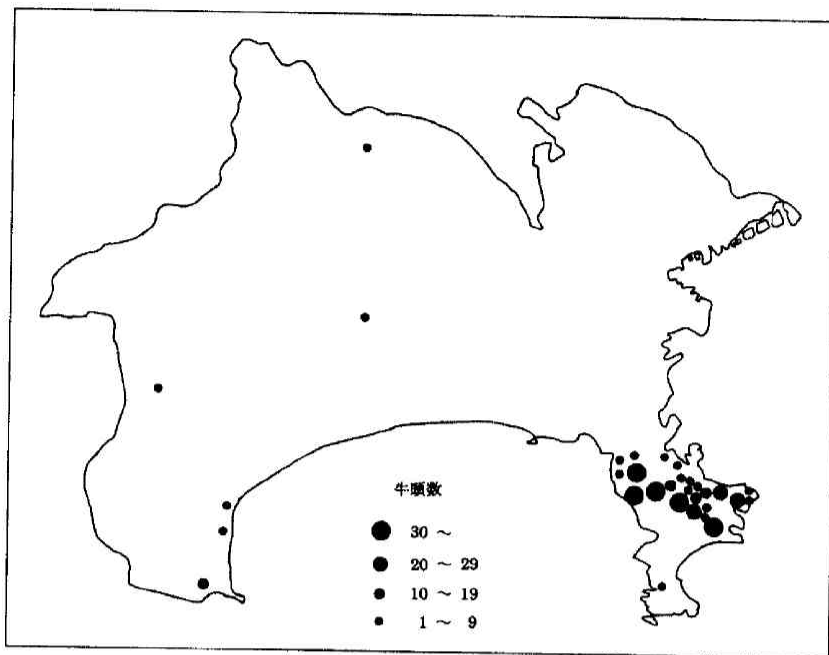


図10 『皇国地誌』にみる牛の分布（明治9年）

[illegible]

表1 神奈川県西部における村明細帳等にみる牛馬の有無  
(天保3年—明治19年)

離的には近い。急峻な地形が障害となつて陸上における交易は困難をともなう場合も多かったと思われるが、古くから船運を介しての技術や人、あるいは物資の交流が頻繁であつたことを、さまざまな伝承からうかがうことができるのである。

### 三 ままとめと課題

#### 履歴伝承の再検討

まず、守屋本の履歴を再考することから始めたい。児玉氏が紹介した所蔵家の伝承では、旅僧が同家に滞在した謝礼として描き残したとされているが、実はもうひとつ別の伝承もある。それは、街道筋の宿屋に逗留していた絵師のもとへ依頼に出向いて描いてもらったとするものである。<sup>(36)</sup> 情報が錯綜しているのは、発見当時の当主が没していることもあって、十分な情報の整理ができていないためである。ただ、後者の方が現実味のある伝承と考えている。守屋家に残る資料に「万諸道具求覚帳」がある。これは、守屋本が描かれた年と同じ安政六年（一八五九）から慶応元年（一八六五）までの、七年余りの同家における生活道具の購入記録である。横帳形式のわずか四頁で、記述されている量は少ないが、それでも碁盤、簞笥、膳、皿、桶、柳行李などの購入金額や購入先などが確認できる。この中で、元治元年（一八六四）に六枚屏風一双を小田原宿にて買い求めたこともうかがわれる。本資料とは直接かわりをもつものではないと思われるが、「屏風」を購入していることや、比較的近い大磯宿や秦野などだけではなく、やや距離のある小田原宿や厚木などが経済範囲に入っていることは注目しておく必要がある。

今のところ、守屋本に直接かわるような資料は見出していないが、守屋家所蔵資料はもちろん、黒岩地域や大磯宿・小田原宿などの在地資料の中に手がかりとなるような資料が残されている可能性もある。暮らしの実態を知るた

めには、その土地に残されている資料を読み解く地道な作業も一層必要となるだろう。

### 生業環境

つぎに、生業環境について考えておきたい。当地は丘陵地における谷戸田の水田稲作であることはすでに述べた。すべての家で耕作できたわけではなく、水田稲作としての条件は決してよいとはいえない。しかし、谷戸田における稲作の作業そのものは、決して「負の作業」ではなく、むしろ家の力の象徴になったのではないかと考えている。つまり、このような環境の中で、水田稲作の耕作図が残されていることの意味を問わねばならないと思うのである。人と土地、家と土地、家と家のかかわりなど、農民階層や家格の問題も考えなければならぬだろう。名主であった守屋家が村の中で実際にどのような立場や存在であったのかということも注意する必要がある。これは水田稲作そのものについてだけでなく、おそらくは簡単ではなかった牛の所有についてもかかわってくることである。水田耕作や牛の所有が特視に値するものであったとすれば、それは同時に家の力の象徴になりえたのではないだろうかということである。

### 文化的環境

家や地域を取り巻く文化的な環境もとりあげておきたい。江戸時代後期から幕末にかけては、地方文化の時代といわれる。いわば庶民レベルでの文化が多様化した時代であり、四季耕作図の普及もその流れにのつたということが考えられる。このような文化的な背景を考えたとき、大磯宿にあった「鳴立庵」と呼ばれる施設の存在を無視することはできない。ここは、かつて西行法師が東国へ下った折に立ち寄って歌を詠んだ地として伝えられており、寛文初期になって小田原の外郎の子孫とされる崇雪が草庵を結んだとされている。その後、元禄八年（一六九五）に、俳諧



師・紀行家であった大淀三千風が入庵し再興して以来、庶民の俳諧道場として現在に至るまで機能し続けている施設である。<sup>(37)</sup>そして、鳴立庵や大磯宿を核として、多くの知識人が訪れ、あるいは逗留し、常に外からの刺激を受け続けてきたところでもある。庵内における数多くの句碑はもちろん、近在の神社などには俳諧奉納額が多数みられるなど、当地周辺の人々の俳諧活動は実に盛んであった。また、守屋家に残る「万諸道具求覚帳」には守屋本の描かれた年と同じ安政六年（一八五九）八月一九日付で、「一金三朱 大磯宿鳴立沢 三千風居士之 御代 中村五所宮 □□にて求」の文字がみえる。ここからは、当時の守屋家当主が俳諧活動などをおして鳴立庵や庵主とのかかわりをもっていたことが想像される。その後、大磯町域には明治一四年（一八八一）に自由民権運動の政治結社である「湘南社」が設立され、ここを拠点に洵綾郡や大住郡を中心に活発な活動がなされたことや、ともすると気候的な好条件ばかりが取り沙汰される別荘地としての発展も、このように近世以来脈々と流れる文化的潮流に源を発するものとして考えられないだろうか。黒岩村という地域、あるいは守屋家という家を考えるうえでは、このような文化的環境を手がかりに求めても無駄ではないように思う。

### 需要の動機

地域総体として文化的関心は高かったであろうことを踏まえたうえで、守屋本が描かれるに至った背景について考えてみたい。紀年銘には「安政六己未月見月八朔<sup>(38)</sup>」とあるが、このうち月見月八朔というのは八月一日を意味している。現在でも旧暦の八月一日や月遅れの九月一日に、八朔という儀礼の記憶が残されている。

八朔というのは、稲作の進行にともなう儀礼として、あるいは中世以降には武家社会を中心に神祭りの供物が封建的主従関係を維持する贈答儀礼という性格も生成されている。<sup>(38)</sup>さらに江戸期に入ると徳川家康が江戸に入ったためた日として幕府の重要な式日として位置付けられており、当地周辺でも伝承として残されている。<sup>(39)</sup>神奈川県内では、

この日を「荒れ日」や「厄日」だといって神社に参ったり、農作物を神に供えたりする事例もうかがわれ、伝承そのものは希薄だが、何か特別な日として意識されている様子をみてとることができる。

農耕図が描かれた絵馬の場合、その奉納時期は稲の稔りの見込みがたった段階で神に感謝し、さらに収穫と上納の無事を祈念することから八月もしくは九月に多いという報告があるが、つまりもともと吉祥画としての性格を有する四季耕作図を、八朔という稲作儀礼にもかかわる特別な日を期して描いてもらったと解釈することはできないだろうか。要するに「月見月八朔」は十分に意識された期日だと思うのである。

また、家格にからめて考えるならば、守屋家は武家社会的な気質を持ち合わせていた家であったり、幕末期の人々の国家意識や風潮といったものに影響を受けていたことも想像される。おそらく、当時は武士階級だけでなく豪農や豪商に至るまで、尊皇攘夷を推し進めていくというような使命感和責任感があつたのではないだろうか。今では想像できないような国家意識といったものを庶民全体がもっていた、あるいはもととしていた時期ではなかったか。守屋家の中にも当時の気運や気質が強く漂っており、それが図柄の神祭りであり、しいては八朔という期日に表わされたのではないかと思うのである。ちなみに、安政六年（一八五九）は横浜開港の年であることも付記しておきたい。

## おわりに

以上を総括すると、当時の世相を含め、かなり地域の実情を知ったうえで描かれているという印象をもつ。もちろん、粉本の可能性がないわけではないが、図柄はパターン化されておらず、今のところ明らかに粉本の存在を見出す描写がでてきていない。引き続き今後、ひとつひとつの描き方だけでなく全体の構図のとり方にも留意しつつ、さらに地域の実情にあわせて描き換えている可能性を念頭におきながら検証していく作業が必要だろう。

しかし、すでにいくつかの光明も得た。守屋本と『農具図説』を重用することで、聞き取り調査では限界のあった農具の変遷を知る手だてとして有効であることも認知できた。守屋本を読み解こうとする過程で得られるさまざまな情報が、地域を総括的にとらえていく視点、いわば地域的視座にとつてたいへん有効であることも大方の賛同を得られるだろう。今後、ビジュアルな地域資料としてますますその活用が期待できそうである。

## 註

- (1) 現在の大磯町域には、高麗寺村・大磯宿・東小磯村・西小磯村・国府本郷村・国府新宿村・寺坂村・生沢村・虫窪村・西久保村・黒岩村が含まれており、いずれも淘綾郡に属していた。このうち黒岩村は旗本の二給村であった。
- (2) 小松郁夫氏のご教示による。
- (3) 『神奈川県史資料所在目録——大磯町』（神奈川県史編集室、一九七二年）四一〇頁。
- (4) 『神奈川県史資料編？ 近世（4）』（神奈川県史編集室、一九七五年）付録。
- (5) 渡部武「耕織図」流伝考——「四季耕作図」の絵解きのために（『民具マンスリー』第一九卷二号、一九八七年）。
- (6) 小川直之「『四季耕作図』の描写と系譜」（『多摩の民具・江戸時代の農具』町田市立博物館図録、一九九一年）。
- (7) 冷泉為人・河野通明・岩崎竹彦・並木誠士『瑞穂の国・日本——四季耕作図の世界』（淡交社、一九九六年）。
- (8) 神奈川県立歴史博物館の鈴木通大氏の呼びかけで始められた研究会。当面は絵画資料を所蔵している博物館等を持ち回り会場として進められ、これまでに一二回の研究会を開催している。
- (9) 『神奈川県管下農具図説』（東京国立博物館蔵）。
- (10) 例えば、明治三五—三六年（一九〇二—〇三）の『町村是調査書』や、明治三八—三九年（一九〇五—〇六）の『農具一覽并図解』があり、当地周辺の村も散見される。

- (11) 註(7)『瑞穂の国・日本——四季耕作図の世界』八〇頁。
- (12) 大磯町国府本郷在住の吉川時春氏(大正二年生)のご教示による。
- (13) 例えば、『平塚市史民俗調査報告書3——土沢・吉沢』(平塚市、一九八三年)には「種をウネにまいて上から草ボウキでたいて種を地の中にもぐらせる」との報告がある。
- (14) 河野通明「中林湘雲筆「四季耕作図屏風」の基礎的研究」(『歴史と民俗』一七、二〇〇一年)。
- (15) 註(14)河野通明「中林湘雲筆「四季耕作図屏風」の基礎的研究」八九頁。
- (16) 河野通明氏のご教示による。
- (17) 註(6)小川直之「『四季耕作図』の描写と系譜」八頁。
- (18) 小川直之「女の田植え・男の田植え」(『民俗』第二一九・一二〇号、相模民俗学会、一九八五年)。
- (19) 『国府の民俗(三)——国府本郷・国府新宿・石神台地区』(大磯町、一九九五年)六〇、六一頁。
- (20) 加藤隆志氏のご教示による。
- (21) 長田平「千歯扱きの地域性——神奈川県下の千歯扱きを例に」(『民具マンスリー』第二九巻一号、一九九六年)。
- (22) 神奈川県下のクルリについては、『南関東のクルリ棒』(関東民具研究会、一九八九年)、加藤隆志「神奈川県下のクルリボウについて」(『民具マンスリー』第二七巻八号、一九九四年)などに詳しい。
- (23) 大磯町西小磯在住の高橋要蔵氏(明治四一年生)他のご教示による。
- (24) 小坂広志「唐箕の伝来と普及」(『日本民俗文化大系一四』、小学館、一九八六年)。
- (25) 河野通明「四季耕作図の流れ」(『描かれた農耕の世界』相模原市立博物館図録、一九九九年)六一頁。
- (26) 例えば、歌川広重「五十三次名所図会」の平塚馬入川の渡船風景では、遠景の富士山の右手前に描かれたゴツゴツとした山稜は、明らかに丹沢山塊と判断できる。
- (27) 『神奈川県皇国地誌残稿 上巻』(神奈川県立図書館、一九六三年)。
- (28) 『神奈川県民俗地図』(神奈川県立博物館、一九八四年)一三頁。神奈川県内では、横須賀市長坂・鴨居・小網代、藤野町菅井、二宮町山西・川匂、松田町寄などで長着の事例が報告されている。

- (29) 『新編相模国風土記稿 第二卷』(雄山閣、一九六二年)。
- (30) 例えば、古島敏雄「近世日本農業の構造」(『古島敏雄著作集 第三卷』東京大学出版会、一九七五年)など。
- (31) 中西僚太郎「明治前期における耕牛・耕馬の分布と牛馬耕普及の地域性について」(『歴史地理学』第一六九号、歴史地理学会、一九九四年)九頁。
- (32) 辻井善弥「三浦半島の牛馬の分布と犁耕」(『民具マンスリー』第二二巻二号、神奈川大学日本常民文化研究所、一九九〇年)。
- (33) 成瀬敏夫『中郡酪農発達史』(私家版、一九九一年)四五頁。
- (34) 註(33)成瀬敏夫『中郡酪農発達史』五六頁。
- (35) 例えば、『むかしがたり』(大磯町教育委員会、一九八七年)では、石廊崎、仁科、伊豆(具体的な地名は不詳)などの地名が登場する散文伝承がみられる。また、伊豆方面から井戸杵などの石を船で運搬したという話はよく聞かれる。
- (36) 小松郁夫氏のご教示による。
- (37) 『石造物調査報告書(二)——鳴立庵』(大磯町教育委員会、一九九〇年)一頁。
- (38) 『民俗学辞典』(東京堂出版、一九八七年)四七五頁。
- (39) 『茅ヶ崎市史3 考古・民俗編』(茅ヶ崎市、一九八〇年)五七〇頁。
- (40) 牛島史彦「『歴史』的背景」(『絵馬と農具にみる近代』板橋区立郷土資料館図録、一九九〇年)三〇頁。
- (さがわ・かずひろ 地理学・民俗学)